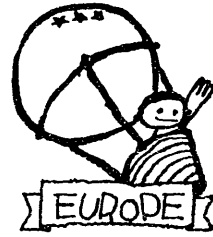


海外だより

渡 欧 日 誌 抄

社会保障研究所研究第3部長 三 浦 文 夫



4月某日、今年のパリの天候は例年になく悪いとのこと、4月上旬というのは可成り寒い。それに雨もよく降る。そのせいか風邪にやられたらしく、身体がだるく、それに熱っぽくとんだことになりそうな気がする。取りあえず、持参の風邪薬、抗生物質薬等をのみベットにもぐり込むことにする。

夜中に教会の鐘の音で眼が覚める。外は依然として雨の模様。寒気がするが、起き上り水を飲もうとして、ミネラル・ウォーターを買っておくことを忘れたことに気づく。パリの水道は硬水で、身体の弱っているときにはお腹をこわすことがあるとのこと。のどのかわきにたえかね、ままよとばかり水道の水を飲む。

心細さはひとしおである。ヨーロッパに来

て未だ数日もたたないうちに、こんな調子ではと自らを叱り本などを読もうとするが続かず、あれやこれやと不吉なことばかりが思い出され、その後ほとんど一睡も出来ずに、曉方に小鳥のさえずりを耳にし、ほっとする始末。

4月某日、風邪はさらに悪く、熱も9度前後ある模様。食欲もほとんどなし。ガルソンのもってきてくれた朝食も全然手をつけず、水ばかり飲む。懸念していた通り腹の具合も悪くなる。水のせいか風邪のせいか分らないが……。

昼すぎ無理に起きて外出、食事のため。フランス式の料理はどうも苦が手であるので、中国料理店を探しスープの外2~3品注文をする。久しぶりに米の飯にありついた訳だが

どうもおいしくなく、スープの外はほとんど残す。果物を買込み、さらにホテルでミネラル・ウォーターを買う。1升瓶ぐらいのミネラル・ウォーターが約180円。

このホテルで一番困ることは言葉がほとんど通じないことである。フランス語はかつて第一外国語であった関係で何とかかなと思っていただものの、本場のフランス語は早口でほとんど理解できない。英語でもしゃべってくると何とか見当がつくのに、このホテルではほとんど英語は駄目。狐みたいな顔をしたマダムがいるときは、何とかフランス語に英語をまじえて、何とか簡単な用件は通ずるがその他のものではフランス語のみで意思の疎通をはからねばならない。しかもガルソンもボンヌもいずれもフランス人ではなくイタリア人、アラブ人などで、なまりの多いフランス語らしく、いよいよ会話はむづかしい。

そういえばパリで目についたことは移民が非常に多い。道路掃除をしたり、ホテルの下働きの人びとの多くは一見してアフリカ系の人であったり、アラブ系の人びとであったりしている。事実、単純労働、底辺の仕事につ

いている人びとは圧倒的に移民が多いとのこと。パリでは「南北問題」は国内問題でありフランスの社会構造そのもののなかにビルド・インされた問題であるようである。

たしかにパリのスラムは正にこれら移民の居住地であり、貧困問題の一部には、これら移民問題が重なっている。フランスにかぎらずヨーロッパの社会福祉のなかで、移民に対する施策なりサービスが重要な意味をもっている理由が何となく理解できるような気がする。またILOの諸条約、勧告やら、ヨーロッパ社会保障条約などで移民問題が取扱われる意味の1つには、このような状況があることを改めて知った。

4月某日、パリに来て10日近くになるのに依然として、風邪は良くなり、熱は続いている。しかし今日はピエール・ラロック氏と会う約束があるので、コンセル・デタに3時に出かける。いかめしいコンセル・デタの建物に入り、ラロック氏へ面会したい旨を伝えると、3人ぐらいの人を通してやっと会うことができた。さすがにコンセル・デタの長官ともなれば会うのも大変なことである。

通訳にはソルボンヌ大学で社会学の修士課程における芝生瑞和氏をたのむ。彼は有名な荒木大将のお孫さんである。アメリカの大学を卒業し、昨年にソルボンヌに来たとのこと。英語は非常に達者であるが、フランス語はそれほど自信がないとのことであったが、心よく引き受けてくれたのである。

ラロックさんは背の高いノーブルな雰囲気をもたせられていた。一見写真でみたドゴール將軍に似ている。健保連の上村政彦さんから事前に連絡をしていただいたおかげで、ラロックさんは気持ちよく面会に応じてくれた。しかも我々のフランス語を聞いて、「自分はフランス語ほど英語は話せないが、よろしければ英語で話しましょう」と気さくに言っていただき、それ以後は英語で話をするにすることにする。

私の用件の1つは、フランスにラロックさんの肝入りで老人問題研究所が設立されていると聞いていたので、この研究所の状況と可能ならば、紹介をお願いすることであった。ラロックさんのお話によると、国立の老人問題研究所の設立の必要は認められているが、

未だ設立されていないとのこと。2～3年後に開設を目標に現在準備中とのことであった。なお現在南仏に規模は小さいがよく整った老人研究所があり、主としてジヤトリクスの研究が行われているが、老人問題に関する社会科学の面からの研究はこれから本格的に行なう必要がでてくる。その意味で近い将来設立予定の国立の老人研究所では、この分野も設けられることになるであろうということであった。この他いろいろの話題で話があったが、最後に日本の老人問題について質問やら意見が出され、そのうち印象深かったことは、定年退職が55歳ときいているが、このような若い年齢での退職制度をもっている、真に有効な老人対策を考えることは至難なことであろうという感想をもらされていたことであった。

暖い人柄に触れながら、つい約束の30分をこえて1時間余にわたっていろいろ話をしてくれたラロックさんのもとを出て、紹介された文献センターで2～3の資料を手に入れ、ホテルに帰ったら、又熱が出てしまった。

4月某日、パリ滞在2週間を経た。風邪は

依然として悪い。しかし次の予定地であるスイスに出かけなければならない。シャンゼリゼのエア・フランスで日程の変更をお願いする。スイスからイタリアに廻る予定を止め、再びパリに戻ることにする。

4月某日、パリよりチューリッヒ。4月下旬というのにチューリッヒの寒さは格別である。夜半から雪になる。

4月某日、チューリッヒよりジュネーブへ。チューリッヒ空港できびしい持ち物の検査を受ける。鞆の内容を全部出し、ひとつひとつ内容を聞かれる。ハイ・ジャックを防ぐためとのこと。ジュネーブ空港にILOの樋口富男氏の出迎えをうける。恐縮のいたり。

4月某日、ジュネーブ日本代表部の渡辺さんの案内で老人ホームを視察・訪問、メゾン・ド・ルワという名称で、慢性病患者の収容施設である。ジュネーブから小1時間位のところにあり、周りは広々とした田園。建物は明るく、敷地も広い。そこかしこに花壇があり、チューリップが美しく咲きこぼれている。

このホームには約360人の患者(うち9割近

くが老人)が収容され、5つの病棟で生活をしている。車椅子で自由に動けるように、廊下はスロープ状で、2階に昇るにもエレベーターが用意されている。医師は1人で、看護婦は5人、その他介護人、給食係等で、合わせて320人ほどの従事者がいる。患者1人当りの従事者数は驚ろくほど多い。パーソナル・サービス部門での省力化が如何に難かしいかを知らされる。もちろん設備その他機械化が進み、省力化に努力しているが……。たとえば今後は是非改善したいこととして、窓の開閉を自動化することとか、呼びリンをすべて電話式に改め、電話で用件が足りるものは電話で行えるようにするなどの工夫を考えたいとのこと。

このホームで不満なことは、リハビリテーションの機能が十分に行われていないとのこと。これが医師の嘆きでもあった。この最大のネックは必要な療法士が得られないということであった。この医師が「日本ではソニー、トヨタなどの素晴らしい工場があると聞くが、そのような国では、さぞかしリハビリ等も十分に行われているのでしょね」という趣旨の質

問をうけ、赤面の思い。エコノミック・アニマルをひやかされた様な気がした。

5月某日、ジュネーブからパリに戻り、さらにイギリスに向う。約20日続いた執拗な風邪もどうやら峠をこしたらしく、熱は下がった。ただ身体のだるさははなはだしい。

ロンドンに一泊し、マンチェスターに向う。空港に韓国の李潤求氏の出迎えを受け、以後李さんのお世話になる。

マンチェスターの町はさすがかつての工業都市の面影を残している。マンチェスター大学の近くでエンゲルスが住んでいた住宅跡などの説明を受けホテルで休む。

5月某日、午前9時にマンチェスター大学を訪問。午前中丁度行われていた保健所長さんたちの研修に出席させていただく。日本でも翻訳されている「医師の報酬」(江間時彦訳)の著者のHogbarth, Jamesのレクチュアがあり、このレクチュアをめぐって活発な討議が行われていた。講義の要点はシーボーム委員会報告後の医療サービスの組織・運営の問題であった。

午後、マンチェスターの南にあるチェスタ

ー・カウンティのノースウイッチに Social Welfare Department を訪問。シーボーム報告後のソーシャル・サービスの運営の状態を知るためである。ノースウイッチにマンチェスター大学の Barbra & Brian Rodgers 教授夫妻が待っていて下さる。両教授の御案内で、ノースウイッチの Social Welfare Department の所長 Miss, Jones と会見。李さんのほか明治学院大学の山崎貴美子助教授（3月にノースウイッチに来て、実地にソーシャル・アドミニストレーションを勉強されているとのこと）も同席。

シーボーム報告とこれにもとづく行政改革は、スコットランドのソーシャル・サービスに多大の影響を与えていることを知る。とくに興味深いことは、この改革のあと、潜在的な福祉ニーズが露わになり、そのために担当ワーカーのケース・ロードがますます重くなっているということである。これは1つにはリバプール、マンチェスターを背後にひかえ人口の移動が激しいという当地の事情もあるが、従来のようにタテ割で調整がうまくいかなかった状態に比較して、総合的にサービスが行われた結果も多分に影響しているとのこ

とである。

ただ問題は有資格のソーシャル・ワーカーの確保がむつかしくなっていることのようなのである。社会福祉におけるマン・パワーの確保は、シーボーム改革の成否を左右するような問題となっている。この証拠の1つは、ガーデアン紙その他に1頁をさいて、ソーシャル・ワーカーの募集が絶えず行われているところにもみることができる。この点は我々としても大いに他山の石としなければならない。

5月某日、マンチェスターの滞在を終り、ロンドンに戻る。

5月某日、サセックス大学にドーア教授を訪問。ドーア教授とは教授の日本留学の折にいろいろ御交際のあった関係で、話が大きいはずむ。サセックス大学のキャンパスの広いこと、美しいこと、日本の大学を思い感慨無量のものがある。

午後 National Institute for Social Work Training に、Hughes Jones 氏を訪問。多忙でその上先約のあったなかを、時間をさいていただく。温い人柄で親切にこちらの質問に分り易く答えていただく。ソーシャル・ワー

カーの典型ともいふべき Jones の人柄に胸をうたれた。

この研修所は national となっているが、日本でいう国立ということではない由、この研修所ももともとはセツルメントであったとのこと。そういえば先日訪ねたトインビー・ホールで、セツルメントの最も大切な仕事の1つはセツラーの養成・訓練であるという趣旨を館長にお聞きしたが、セツルメント活動と教育・訓練の結びつきの重要性を改めて教えられた思いであった。

5月某日、今回の渡欧の最大の目的の1つであったロンドン大学に R. Titmuss 教授を訪問。教授は前日まで外国旅行をしておられたため、ロンドンを去る前日にやっとお会いすることができた。

写真でみる通り、ほっそりとされているが背の高い方である。ややウオリッシュなまりではあるが、ゆっくりと分り易く話をしていた。話は主として教授の著書 "Commitment to Welfare" (『社会福祉と社会保障——新しい福祉をめざして——』拙訳)の内容についてであったが、ここでもシーボーム報告の評

